

裔然の入宋と上表文

山口修

一

東大寺の僧裔然等の一行は、永觀元年（九八三）八月一日、筑紫より吳越商人の船に便乗し、同月十八日には台州に達した。それより中国の各地を巡歴すること約三年、寛和二年（九八六）七月、宋商の船によって筑紫に帰着した。その際、宋版大藏經をはじめ、いま清凉寺の本尊と仰がれる梅檀瑞像、すなわち三国伝来と称する釋迦如来立像など、かずかずの秘宝を将来したことは、つとに有名である。

入宋の経緯および宋国における裔然の行跡に関しては、宋史^{一四九}日本国伝の記述や、瑞像の胎内から発見された『入宋求法巡禮行並瑞像造立記』や『入瑞像五臓文』によって知ることができる。また瑞像および像内の納入品については、塚本善隆先生をはじめ、美術史家による研究および解説があり、改めて瑞像の由来や納入品に関して検討することは、本稿の目的ではない。^一ここでは宋国における裔然らの足迹を、簡単にたどっておく。

裔然らが入宋したとき、宋においては太宗の太平興国八年であった。一行は九月、天台山に詣り、智者大師の靈蹤を訪れた。ここで約一ヶ月を過ごしたが、十月八日には上京すべき詔命を蒙り、北上の途に就く。

汴京開封府に到着した裔然は、太宗に謁見して、日本より持参した礼物を献上し、大いに太宗を悦ばせた。裔然に

対しては、とくに紫衣を賜わった。

明けて雍熙元年（九八四）正月、裔然は許されて滋福殿に参入し、念願の瑞像を拝するを得た。そして三月には五臺山に向かつて出発し、五臺山の諸寺院を巡拝した。帰途は洛陽から龍門石窟を巡歴し、六月二十四日に帰京した。

また越年して雍熙二年（九八五）三月二日、辞去するに当って、太宗に拝謁し、法濟大師の号を賜わった。その上に、開板されて間もない蜀版大藏經、および新訳經、その他かずかずの賜與を蒙った。かねてより願ひ出ていた瑞像の模刻も、とくに許された。

模刻は帰途の台州において行われ、八月には完成した。瑞像の胎内には絹の五臟六腑をはじめ、手写の經文や文書の類、また水精や瑪瑙などの珠玉が納入された。こうして帰航の便船を待ち、僧像經とも恙なく筑紫に帰着したのである。

帰着が大宰府から奏され、裔然ら一行が像經と共に入京したのは、永延元年（九八七）二月であつた。三月十一日、裔然は法橋位に敍せられた。八月十八日、裔然は愛宕山を以て五臺山大清凉寺と号し、一伽藍を建てて瑞像を安置したい、と奏請した。しかし清凉寺の建立は、裔然の在世中には実現せず、その没後、ともに入宋した弟子の盛算によつて、栖霞寺のなかの釈迦堂を以て清凉寺と号することを勅許されるのである。

裔然は五臺山清凉寺を建立する運動をつづける旁ら、その一助として、中国の五臺山清凉寺に再び参詣し、さらに宋国で進められている新訳の經論を請来したいと考えた。よつて、さきに同行した弟子の嘉因と³折乾とを、かわつて入宋せしめることを図った。その許可を得たのは、永延二年（九八八）二月八日である。

一行が宋から帰国するにあたって便乗したのは、宋商鄭仁徳の船であつた。その鄭仁徳が帰航するに際して、嘉因らも同船し、再び入宋したわけである。裔然は、太宗に奉呈する上表文、および貢物を、嘉因らに托した。この上表

文の全文および貢物の全品目は、宋史^{四九} 日本国伝に採録されている。

裔然の上表文は、まことに格調の高い名文である。ただし難解な表現の箇所があり、そのためであろうか、今日まで宋史日本国伝を読み下し、あるいは口語訳をほどこした書物は、数種刊行されているが、この難解の部分に注解を加えたものは見あたらない。よって、ここに解釈を試みたいと考えた次第である。

二

裔然の上表文は、冒頭の二句が中国の故事にもとづいた譬喩であり、難解であるため、未だに適當な解説は發表されてい^レない。この節では、まず冒頭の句を取りあげよう。

「傷鱗入夢、不忘漢主之恩^{四〇}」。

この文は、人口に余り膾炙されていない故事にもとづくと考えられる。すなわち裔然が宋国に滞在中に開版を見た『太平御覽』に引用された漢代の故事である。太平御覽^{三九}には「應夢」と題して、さまざまな故事を集めているが、その中に『辛氏三秦記』より、次の記事を採録した。

昆明池。漢武停缸立之、習水戰也。中有靈沼神池。云、堯時、治水訖停缸。池通白鹿源。人釣魚於此、綸絶而去。夢於漢武求去其鈎。明日、帝戲於池、見大魚銜索。帝曰、豈非昔時所夢也。取而去其鈎故之。

この文によってみれば「漢主」とは、漢の武帝であった。長安の西南にある昆明池には、靈沼神池と呼ばれる池があった。堯のとき、すでに治水が行われたと伝えられる、由緒ふかい池である。ある人が、ここで魚を釣ったが、糸が切れて、魚は逃げた。武帝は、その魚が鈎を取り去るを求めている夢をみたのである。

明くる日、武帝は池に臨むと、大魚が（鈎と）糸をくわえて泳いでいるのを見た。武帝は、これこそ、かつて夢に

みた魚ではなからうか、と考えた。そこで魚から鉤をとってやり、ふたたび池に放した。

こうした故事がある以上、上表文の冒頭の句は「傷鱗も夢に入れば、漢主の恩を忘れず」と解することができるであらう。

さて「傷鱗」とは、奮然その人を譬えたに違いない。故事における魚は、武帝の夢に入ったがゆえに、恵みに浴して放たれた。その魚の身になって、奮然も、宋の太宗の恵みに浴した恩を忘れることができない、と述べたものと考えられる。

ところで出典となった『辛氏三秦記』は、御覧および太平廣記のほかに、説郛などの類書にも引用されているが、この漢武の故事は掲げられていない。また『漢魏遺書鈔』には、まさしく「昆明池」以下の全文が引用されているが、それは太平御覧からの転載である。奮然も、太平御覧によって、この故事を知ったことであらう⁵⁾。

太平御覧は、太宗の太平興国二年に編修が開始され、同八年（九八三）に完成した。その年、奮然は入宋したのである。宋国に滞在する間、奮然は開板されたばかりの太平御覧を、閲読したのであらう。そして帰国後、御覧によって知った漢武の故事を、上表文の冒頭に掲げたのではなからうか。

しかし昆明池の故事を、奮然が太宗の厚恩を謝する譬諭に用いることは、いささか無理と言わねばならないであらう。上表文を受けとった太宗、および側近たちも、果たして奮然の真意を理解できたであらうか。ともあれ誰も殆ど知らないような故事を以て、冒頭に据えた点には、奮然その人の性格があらわれているように思われる。

三

漢の武帝にまつわる故事につづいて、冒頭の第二句は、

「枯骨合歡、猶亢魏氏之敵」

と示された。⁽⁶⁾

ここでも故事を引用して譬喩に用い、心情の一端をあらわそうとしている。しかし第二句に引用された故事は、春秋左氏伝の宣公十五年（前五九四）に掲げられたものであり、第一句と違って、古代史に通じていれば容易に理解できるであろう。次に左氏伝の文を掲げる。

〔宣公十五年〕

秋七月、秦桓公伐晋、次于輔氏。壬午、晋侯治兵于稷、以略狄土、立黎侯而還。及雒、魏顆敗秦師于輔氏。獲杜回。秦之力人也。初魏武子有嬖妾、無子。武子疾。命顆曰、必嫁是。疾病則曰、必以為殉。及卒、顆嫁之、曰、疾病則亂。吾從其治也。及輔氏之役、顆見老人結草、以亢杜回。杜回躡而顛、故獲之。夜夢之。曰、余而所嫁婦人之父也。爾用先人之治命、余是以報。

これは春秋時代の中期における晋と秦との抗争にまつわる故事である。秦の軍が晋を攻め、輔氏に陣した。晋の軍は、これをむかえ討ったが、別軍を率いた魏顆は、輔氏において秦の軍を破り、大力を以て聞える杜回を捕えた。すなわち上表文にある「魏氏」とは、晋の大夫たる魏氏にはかならない。その子孫が後に独立し、戦国七雄の一なる魏国をつくる。

ところで魏顆の父を武子という。名は犇^{しゅう?}。魏武子には愛妾があつたが、子をなさなかつた。やがて病床に臥すと、顆をよび、死後は必ず再嫁させよと命じた。しかし病状が重くなると、必ず殉死させよと命じた。こうして武子は亡くなったが、顆は、父の愛妾を他に嫁がせてしまった。病が重くなると心が乱れる、自分は父が正気のときの心にしたがつたのだ、と語った。

輔氏において戦うに及び、顯は老人が草に結び目をつくっている姿が見えた。杜回は草につまづいて転倒し、そこで生け捕ることができた。しかし、魏顯が見た老人の姿は、まぼろしであった。その夜、夢のなかに老人があらわれて、告げた。自分は再嫁させてもらった婦人の父である。汝が故人の正常なときの心にしたいがい、娘を助けてくれた恩返しをしたのだ、と。

こうした故事をふまえて、奄然は自らの心情を托した。すなわち「枯骨」とは、再嫁した娘の亡父であり、娘が殉死することなく、再嫁できた歎びを、共に歎んでいる。すなわち「合歎」である。その恩に報いるため、老人は「魏氏」すなわち魏顯の「敵」となった杜回到「亢」して、捕えることのできる機縁をつくった。ここでも第一句と同じく、夢にみた話が主題とされている。

そうして奄然は、自らの太宗に対する謝恩の心が、魏氏の敵に亢して報いようとした枯骨の想いと、同じようなものであることを述べたのであろうか。したがって第二句は「枯骨も歎を合すれば、猶ほ魏氏の敵に亢するがごとし」と読むことができよう。それにしても、この譬喩は第一句と同様に、修辭に走りすぎた嫌いなしとは言えない。

なお魏氏は、のちに晋国の領域を三分して自立し、周室から諸侯に列せられた。その都は大梁、すなわち後の開封に置かれた。いま宋の都も開封であり、魏氏の故事を取上げた背景には、同じく開封を首都としている宋の王朝を念頭に置いた、とも考えられる。

四

以下の文章は、とくに難解ではない。上表文の序辭にあたる部分は、次の文章で締めくくられる。

「雖云羊僧之拙、誰忍鴻霈之誠。奄然誠惶 誠恐 頓首 頓首 死罪」。

羊僧とは、啞羊僧の意であり、四種僧の一に当る。羅什訳『大智度論』三や、玄奘訳『地持十輪經』五に、啞羊僧について述べられていることは、いまさら言うまでもない。ところで『本朝文粹』二には、慶滋保胤の筆になる「齋然上人入唐時爲母修善願文」が収められており、そのなかには齋然の入宋の目的を述べた語として、

我是日本国 無才無行 一羊僧也。爲求法不來、爲修行即來也。

という表現がなされている。上表文において、自らを「羊僧」と称し、卑下の意をあらわしたのも、願文における表現と対応したものに違いない。

そして太宗に対しては、鴻霈の語を用いて、大雨のごとき恩に潤おう感激を伝えようとしている。次につづく誠惶以下の語は、改めて述べるまでもないであろう。それにしても、頓首の語を二回くりかえし、死罪とまで表現したことは、いかに恐懼しているか、その情をあらわして余りある。

表文の冒頭、自己の名を示すにおいても、宋の朝廷を「大朝」と記し、まさしく日本国は、その属国のごとくである。もっとも此のような態度は、入唐および入宋の僧にとって、共通のものであったろうか。

ここで表文の序辞は終り、以下の本文には、宋国に滞在している間における厚遇に対し、謝辞をつらねる。

五

齋然ら一行の渡宋の航行は、吳越商人の船によったため、前代における遣唐船の場合に比すれば、きわめて順調であった。初めに述べた通り、二十日足らずの航行で筑紫から台州に達したのである。

「齋然附商船之離岸、期魏闕於生涯、望落日而西行。十萬里之波濤難盡、顧信風而東別。數千里之山嶽易過、妄以下根之卑、適詣中華之盛。」

裔然にとって入宋は生涯の望みであつた。しかも忽ち朝廷に参じ、皇帝に謁するの榮を得たのである。ここでも宋の朝廷を「魏闕」と表現し、序辞のなかの「魏氏」とかさねて、再び「魏」の文字を使っている。魏は高大の意であると共に、開封すなわち往時の大梁に都した戦国の魏国を、やはり念頭に置いたのであらうか。

筑紫から海上に波濤を越えること「十萬里」、そして台州からは天台山をへて開封に至るまで「數千里」の行程であつた。詔命によって上京したのであるから、私人の行旅とは異なつて、あらゆる便宜が供されたわけである。こうして到達するを得た開封の都は、まさに「中華の盛」そのものであり、繁榮のさまは『東京夢華錄』や『清明上河図』などによって、詳しく知ることができる。

なお「中華の盛」というのは、もちろん修辭ではあろが、事實においても宋朝は、裔然らが入宋したころ（九八三—五）、極盛をむかえていた。すなわち趙匡胤の建国から二十余年を過ぎ、太平興國四年（九七九）にはいわゆる十國のうち最後まで残つた北漢を降し、中國の統一を達成したのである。ただ燕雲の地は遼の領有するところであつたが、まだ南侵の動きは示していない。

「於是、宣旨頻降、恣許荒外之跋涉。宿心克協、粗觀寓内之壤奇。」

裔然らの一行が開封に達したのは十二月十九日であつた。そして十二月二十一日、宮城に参入し、崇政殿において太宗に謁した。このとき裔然は緑衣をまとい、表啓一卷と共に、日本から持参した銅器や書籍の類を献上した。品目について宋史日本国伝は、くわしく列挙している。さらに裔然に対する優待のほどを「太宗召見裔然、存撫之甚厚。賜紫衣、館于太平興國寺。」と記しているが、釈迦像内に納入された『入瑞像五藏文』⁽⁸⁾によれば、開封すなわち汴京に到着の後、接見および優待の様子は、裔然みずからの筆によって次のように記されている。

十二月十九日到汴京、泊于郵亭⁽⁹⁾。至廿一日朝謁應運統天睿文英武大聖至明廣孝皇帝於崇政殿、奏對。蒙宣賜紫

衣并例物。随侍僧四人 嘉因 定縁 康城 盛算等、各授青褐袈裟及錫資等。奉傳聖旨於觀音院安下、供須繁盛、不可具陳。

まさしく「存撫之甚厚」という宋史の表現そのものであった。ところで齋然が入宋するに当り、最大の目的は、五臺山に詣でることであつたが、これも願ひ出て勅許されたのである。宋史日本伝は記す。

齋然復求詣五臺。許之、令所過統食。

さきに入京した際、郵亭に泊つたとあり、ここに「食を続がしむ」とあるから、天台山から開封まで、さきに五臺に至るまでは、駅路の利用を許されたものと考えられる。このことが「怒許荒外之跋涉」と表現された。『入瑞像五藏文』にも「蒙宣給一行裹纒、逐處津送」と述べている。

ただ表文における「荒外」とは、国境の外、あるいは荒僻の地を意味する。五臺山は代州（山西省北部）に属し、ここに至る道は古くから開かれていて、必ずしも荒僻の地ではない。しかし当時、代州は宋国の北境であり、その北方は五代の後晋朝以来、遼の占拠するところ（燕雲十六州）となつていた。その意味では宋国の最北端に近くまで達したのである。南の台州から北の代州まで辿つたのであれば、ほぼ禹域内の瑰奇をみた、といつてもよいであろう。

「況乎金闕曉後、望堯雲於九禁之中、巖扃晴前、拜聖燈於五臺之上。」

この文の前半は、太宗の宮廷をたたえる修辭であり、後半と對句をなしている。金闕の語は唐人の詩句のなかで、しばしば用いられているが、とくに岑参の「和中書舍人賈至早朝大明宮詩」には「金闕曉鐘」の語が見える。

齋然ら一行は三月十三日に開封を発し、四月七日には五臺山の大華嚴寺に達した。ここは山中における華嚴の道場であり、東大寺僧の齋然にとっては、ことさら感慨が深かつたであろう。折りしも当日の午後、菩薩像の右身の上に白光が発するという奇瑞が示現した。

四月十四日、一行は北臺に登って金剛窟に礼拝した。つづいて東臺に登り、夜を明かしたが、ここでは文殊の化身かとも感じられる一老人に遭った。¹¹⁾さらに一行は、中臺と西臺とに登った。中臺に建てられていたのが、清凉寺である。五臺山のなかでも最も早期に開かれ、山中の中心に位して、当時はすこぶる威容を誇っていたことであろう。¹²⁾

こえて四月二十三日、一行は南臺に登った。表文に「聖燈を五臺の上に拜す」とあるのは、この日の夜半のことである。『入瑞像五藏文』には次のように記す。

二十三日遊南臺。夜至三更時、有聖燈二炬現。勤拳知忝歸命不任豁、此是神魂、副當年之心願、盤桓兩月、澄息諸緣、其何鄉國須還、瓶囊是舉。

このように齋然は、南臺において見た奇瑞に、ことさら深い感慨を覚えたのであった。よって、南臺における感激を、上表文のなかにあらわしたものと考えられる。

六

齋然らの一行は、五月二十九日に五臺山を発し、南下して洛陽に至った。ここでは白馬寺に詣り、密教をきわめた崇智に会った。さらに六月十八日には龍門に赴いて、金剛智や善無畏の墓塔に詣り、廣化寺においては善無畏の跏坐合掌する遺体を拜した。¹³⁾

こうして一行は、天台山より始めて沿道の諸寺を巡歴しつつ開封に達し、さらに五臺山より洛陽をへて、六月二十四日には開封に帰着した。七月から八月にかけては、清昭（清沼）三藏について金胎両部の密教を受けている。これより翌年にかけて、一行は開封において諸寺をめぐり、教えを受けたり、佛典の書写につとめたり、修行を重ねたのであった。その間の十月七日、太宗の乾明節（誕聖節）にあたり、随行した弟子の二人が剃髪受戒した。二僧は乾明節

に因んで祈乾、祈明と名づけられた。この祈乾が、後に嘉因と共に、奄然の上表文をたずさえて入宋するのである。さて上表文のなかに、前文につづいて、

「就三藏而稟學、巡數寺而優游。」

と述べているのは、以上の経過をあらわしたものである。さらに曰く。

「遂使蓮華廻文神筆、出於北闕之北、貝葉印字佛詔、傳於東海之東。」

奄然らは開封の都に滞留すること八ヶ月余り、雍熙元年三月二日には退去にあたって太宗に拜辞した。このとき奄然は、法濟大師の号を賜ったほか、おびただしい量の恩賜の品を受けた。奄然みずから記す（前掲書）。

至乙酉年三月二日、告辭金殿、面對龍顏。蒙宣賜師号 及大藏經四百八十一函、五千四十八卷、新翻譯經四十一卷、御製廻文偈頌、絹帛例物等。

表文に「蓮華廻文の神筆」とあるのは、すなわち太宗の「御製蓮華心輪廻文偈頌」であり、全二十五卷にわたる尨大なもので、五言もしくは四言の廻文をなす。御製なるが故に「神筆」とあがめた。いうまでもなく「北闕の北」とは「東海の東」に対する修辭の句である。

そうして大藏經は「貝葉印字の佛詔」とあらわしているが、これは宋初に初めて開板された漢訳大藏經であり、もちろん貝葉印字の經卷ではない。蜀版とも開宝藏とも呼ばれているように、太祖の開宝五年（九七二）、蜀において雕造が開始された。完成は太平興國八年、まさしく奄然らが入宋した年であった。宋史日本伝の記事中にも「又求印本大藏經、詔亦給之」と記している。

いっぽう太宗は、その前年から太平興國寺の訳經院において、あらたに經典の訳出を開始させている。新訳經四十一卷とは、こうして漢訳されたものが加えられたのであった。開宝藏と新訳經は、奄然によって東海の東、すなわ

ち本邦に伝えられ、いったん京都の蓮台寺に納められた。のち裔然の死後、弟子の盛算によって、法成寺に献納されている。⁽¹⁶⁾

「重蒙宣恩、忽趁來跡。季夏解台州之纜。孟秋達本國之郊。」

こうして裔然らは開封を離れ、かつて上京した行路の跡をたどって、六月二十七日には台州に達した。その際、さきの恩賜のほか、優填王造と伝えられる釈迦瑞像の模刻を許されたのである。まさしく「重ねて宣恩を蒙った」のであった。模刻は台州において七月二十一日に始められ、八月十八日に完成した。瑞像に関しては、改めて触れるまでもないであろう。

台州を発したのは翌三年（九八六）六月である。上表文には「季夏」とのみあるが、どういうわけか越年したことを示していない。商人鄭仁徳の船に便乗し、七月一日、博多湾に到着した。⁽¹⁷⁾

「爰逮明春、初到舊邑。縑素欣待、侯伯慕迎。」

宋国より将来した瑞像や大蔵経などと共に、裔然が入洛を果たしたのは、寛和三年（九八七）正月十七日のことであった。大量の将来品を洛中へ運び入れることについて、これまでに山城国などから労役の負担について抗議がなされ、ために入洛も遅れたわけであったが、こうした問題を詳説することは、本稿の目的ではない。⁽¹⁸⁾

入洛の様子は、上表文にあらわされている通り、京の上下をあげて湧かせ、僧俗を問わず、欣待し、慕迎したのであった。像と経と、裔然らの一行は、盛大な行列を組んで進み、ひとまず蓮台寺に入った。その情景は『小右記』などの日記類によって知ることができる。

入宋から帰国に至るまでの厚恩を謝しつつ、その経過を述べ畢った齋然は、上表文の末尾を次のように綴った。

「伏惟 陛下惠溢四溟、恩高五嶽、世超黃軒之古、人直金輪之新。齋然空辭鳳凰之窟、更還螻蟻之封。在彼在斯、只仰皇德之盛、越山越海、敢忘帝念之深。縱粉百年之身、何報一日之惠。染筆拭淚、伸紙搖魂、不勝慕恩之至。謹差上足弟子傳燈大法師位嘉因、并大朝剃頭受戒僧祚乾等、拜表以聞。」

この文章については、論述する要はないであろう。宋史日本伝には、表文の日付を「稱其本国永延二年歲次戊子二月八日、實端拱元年也」と記している。

最後に齋然が自らの法名に用いた「齋」の字について、些か考えみたい。齋の字は「大也、多也」（玉篇）という意味をもっているようであるが、一般には殆ど用いられないことがない。また中国においても、この字を名や字あるいは号に用いた例を私は知らない。康熙字典も、齋の字の説明に「宋咸平中、日本僧齋然、以鄭玄註孝經來獻」と述べて、宋史日本伝の記事に拠り、しかも齋然の名のみを挙げている。

つまり齋然は、おのれの法名に、一般では殆ど用いられず、したがって字義も直ちには理解できないような字を、敢て選んだわけである。こうした姿勢は、表文の冒頭に採用した故事、とくに漢武の故事の引用と、相通するものがあることを指摘できるであろう。

因みに齋然の後、この字を用いた人物の例を挙げておきたい。東寺長者、仁和寺別当を歴任した齋助という人物がある（一二七—九〇）。本朝高僧伝五五にその伝があり、もとより東寺、仁和寺の記録にも録されている。

江戸時代には、江戸神田の菓子商、真志屋五郎作が剃髪して、法名を東陽院寿阿弥陀佛曇齋と称した。この法名に

ついで森鷗外は『浜江抽齋』のなかで「曇齋とは好劇家たる五郎作が、音の似通った劇場の緞帳と、入宋僧裔然の名などを配合して作った戲号ではなからうか」と述べている。⁽¹⁹⁾

〔注〕

(1) 塚本善隆先生の「清凉寺釈迦像封蔵の東大寺裔然の手印立誓書」(仏教文化研究4号、および全集7所収)をはじめ、一連の研究がある。釈迦像の解体修理の経過をはじめ、裔然の入宋と釈迦像の将来、さらに清凉寺の沿革に関しては、佐藤春夫『釈迦堂物語』に詳しい。

(2) 瑞像の由来に関しては、『清凉寺縁起』が、絵と詞書とをまじえつつ、造像より清凉寺に納入される経過を、くわしく描いている。

(3) 嘉因は、宋史日本伝の記事中には「喜因」と記されている。ただし裔然の上表文および『扶桑略記』など日本側の史料は、すべて「嘉因」としている。また折乾は『日本紀略』に「礼乾」と示されるが、『扶桑略記』は「折乾」としている。

(4) たとえば岩波文庫版『旧唐書倭国日本伝・宋史日本伝・元史日本伝』(以下、岩波文庫版と略記)においては、次のように口語訳された。「傷鱗が夢に入るとも、漢主の恩を忘れず」。これでは訳文にならないので、別に英訳を付している。すなわち、
“……he saw in dream a wounded serpent, which reminded him of the generosity of the Chinese sovereign,……”
この英訳においても「漢主」は「中華の君主」と示されるのみであり、特定の人物は明らかにされていない。

(5) 太平御覧とはほぼ同じ時期に『太平廣記』が編纂されている。そして同書²にも「報應」の部に「漢武帝」と題して、やはり『三秦記』から同じ故事を引用している。御覧の引用とは字句に若干の異同があるので、参考のため掲げておく。

昆明池。漢武帝鑿之。習水戰。中有靈沼神池。云。堯時洪水。停船此池。池通白鹿源。人釣魚於原。綸絶而去。魚夢於武帝。求去其鉤。明日。帝遊戲於池。見大魚銜索。曰。豈非昨所夢乎。取魚去鉤而放之。帝後得明珠。

太平御覧と太平廣記と、引用の文における異同は、典拠とした『三秦記』に、そもそも異同があったのか、あるいは太平廣記の編者が、適当に原文を改めたのか、いずれかであろう。ただし御覧には「辛氏三秦記曰」とあり、廣記には「出三秦記」とあるところから見れば、後者のように考えられる。

また太平廣記は、通説によれば、北宋の人士の見るところ多くなかったという。こうした通説にしたがえば、奄然が見たのも御覧であつた、と考えられるであらう。

- (6) この句を岩波文庫版は「枯骨斂を合するも、なお魏氏の敵に亢す」と訓読し、やはり英訳を掲げている。
“……dead bones joined together still defy the enemies of the Wei dynasty”

すなわち「魏氏」を魏国（戦国時代？）あるいは魏王朝（曹魏？）と解されたようである。

- (7) 史記^{四四} 魏世家に魏武子の簡単な伝が掲げられている。

- (8) 『入瑞像五藏文』は、末尾の目録の部分を除いた全文が、前掲（一）塚本論文のなかに引用されている。

- (9) ここで「泊于郵亭」と記されているところから見れば、奄然らの一行は駅路によって上京し、とりあえずは郵駅の施設に導かれた。謁見の後、宋史にあるように太平興國寺に滞在する優待を受けたわけである。さらに開封から五臺山への巡行に当つても、駅路を利用する便宜を供されたに違いない。

- (10) 奄然の筆（入瑞像五藏文、以下も同じ）によれば、このときの情景は次のごとくであつた。

其日申時、菩薩右身上、化出日光、移時不散、僧俗三百來、人悉皆瞻覩。

- (11) このことについても、奄然は次のように記している。

至十五日凌晨、於東臺、見一老人。約年八十、鬚髮俱白、身被紫裳三山帽、着靴、手携數珠。領侍從二人、遶龍池。其侍從各年二十來許、一人着青衣、裏頭巾、手執香爐、一人着白衣、裏頭巾、手執拄杖。踟躕而去、不知所往。

伝えるところによれば、唐の儀鳳元年（六七〇）、闕賓より入唐した佛陀波利は、五臺山に赴いて、文殊の化身という老翁に遭い、その教えによつて再び西国に帰る『佛頂尊勝陀羅尼經』の梵本を得て、長安に至り、漢訳をなした後、再び五臺に入ったという。五臺開山の縁由を語る伝説と同じく、奄然もまた、ふしぎな老翁に遭つた。さては文殊の化身が、また現われたかと、感慨を深くしたものであらう。

- (12) 五臺山の諸寺院は、近年に及んで修復が進められ、靈場としての威容を取りもどしつつある。しかし清凉寺は、文化大革命を経て破壊されたまま、今は清凉石という青藍色の石が、往年の寺跡を示しているばかりである。

- (13) 『入瑞像五藏文』の末尾には、とくに追記して、次のように記す。

去年六月十八日、參洛京龍門、禮拜善無畏三藏眞身。

(14) この箇所を、北京版評点本においては、次のように句読をふっている。

遂使蓮廻文、神筆出於北闕之北、貝葉印字、佛詔傳於東海之東。

この句読では意味が通じない。

(15) 太宗の御製は太平興国八年(九八三)の撰であり、僧録司に命じて注解を施させた。原文ならびに注解とも『影印宋藏遺珍』上集に収められている(民国24年刊)。

なお岩波文庫版においては「廻文」について、辞書が示す通り「始終から読んでも、中央から旋回して読んでも、意味をなすようにつくった詩文」と解説している。太宗御製における冒頭の句を挙げれば、次の如くである。

垂要理真詮	義非深意大	誰教指因縁	善歸心會解
要理真詮義	非深意大誰	教指因縁善	歸心會解垂
理真詮義非	深意大誰教	指因縁善歸	心會解垂要
真詮義非深	意大誰教指	因縁善歸心	會解垂要理
詮義非深意	大誰教指因	縁善歸心會	解垂要理真

(以下略)

(16) 前掲(1)塚本論文参照。

(17) 博多に到着後の動静については、扶桑略記廿七に、次の如く見えている。

〔寛和二年七月〕九日。大宰府言大宋國商客鄭仁德來着狀。

八月廿五日。仰大宰府。令歸朝入唐僧裔然等。

(18) 前掲(1)塚本論文参照。

(19) 現代の人物に関しては、言及を避けたい。

〈付記〉 裔然上表文の解説に関しては、かつて波多野太郎先生より懇切な示教を受けた。とくに記して厚く謝意を表する。